

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18520160  
 研究課題名（和文） 新しい『ファウスト』研究における〈道化論〉的視座の可能性  
 研究課題名（英文） Möglichkeiten der <narrenhaften> Perspektive in der neueren Faust-Forschung  
 研究代表者  
 田中 岩男（TANAKA IWAO）  
 弘前大学・人文学部・教授  
 研究者番号：70091618

研究成果の概要：『ファウスト』の「道化性」との関連で3つのプロローグの構成的な意義を説明した。具体的には、①「天上の序曲」で打ち出された「道化」としてのメフィストと、ゲーテが「ひじょうに真面目な諧謔」と呼ぶ『ファウスト』の独特な性格とが一体のものであること②バロック劇の「世界劇場」の形式を借りた「道化性」によってはじめて、真にアクチュアルな問題を取り扱うことが可能になり、それによって『ファウスト』の「近代性」もまた保証された、こと等である。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	300,000	1,800,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：道化、喜劇性、諧謔、トリックスター

## 1. 研究開始当初の背景

(1)ゲーテ生誕250年(1999)を契機に、新校訂版テキストを始め各種の基礎的資料が公刊され、『ファウスト』研究も新たな段階に入ったと見ることができる

(2)解釈の面でもじつに多面的なアプローチがなされてはいるが、①全体を総合する視点が欠如しているように思う②言い換えると、テキストに「多義性・多層性」をもたらしている本質的なものそれ自体が十分に問われ、解明されているとはいえない

(3)とりわけ、①テキストの構成的な要素と

しての「喜劇性」「諧謔性」についての研究が不十分である②『ファウスト』の「喜劇的」側面についての研究は皆無ではないが、きわめて立ち遅れている。たとえば、ミュラー＝ザイデル(1968)やH・メイエル(1970)の論文は例外的な研究といえるが、これらも作品の「喜劇性」を「構成的」なものとして捉えるには至っていない③生前最後の手紙においてゲーテは、『ファウスト』を「このまことに真面目な戯れ(諧謔)」と呼んでいるが、従来「真面目な」思想・内容の解明に傾きがちであった研究に「戯れ(諧謔)」の要

素を持ち込むことによって、多義的・多層的なテキストを総合する視点を模索することはきわめて有意義であり、不可欠であると思われる

## 2. 研究の目的

(1)『ファウスト第一部』を刊行するに先立ち、1800年前後にゲーテは『第二部』全体をも展望した構想の上に立って、3つのプロローグを書き添えている。テキストに加えられたこの3つのプロローグの「構成的」な意味を解明することが第一の課題となる

(2)①3つのプロローグのうち、直接テキスト内容に関わる、その意味でもっとも重要な「天上の序曲」において特に強く打ち出された、メフィスト＝「道化」の意義を考察する②バロック劇における「世界劇場」の観念から、「天上の序曲」のもつ形態的・様式的意味を解明する③従来、上演において省略されることの多かった「劇場での前狂言」を『ファウスト』劇と一体の本質的な要素と捉え、とりわけ「喜劇性」の観点から「道化役」に着目して、第二のプロローグの持つ「構成的」意味を明らかにする④第一のプロローグにあたる「献詩」は上演においてほとんど問題にされることがなく、本来の『ファウスト』劇からも切り離して論じられることが普通であるが、これをテキストを相対化する「メタテキスト」と見ることによって、このプロローグが加えられたことの意味を考察する⑤総体として、テキストの「構成的」要素としての Scherze (諧謔) の意義を究明する

(3)具体的には、①メフィストを「道化」と捉えることによってテキストの「喜劇性」「諧謔性」を解明すると同時に②それによって全体を総合する視点を獲得することを目指す③たとえばメフィストを「道化」と見る視点から、メフィストを「いたずら好きのおじさん」と呼ぶ「神話的トリックスター」ホムンクルスの「道化性」も明かされるであろうし、④メフィストが介入することによって、およそ「喜劇性」とは無縁に思われる『第一部』、とりわけ〈グレートヒェン悲劇〉において醸成される「悲劇の中の喜劇性」とでもいった要素も、解明することが可能となるであろう⑤繰り返しになるが、こうした「喜劇的」側面をテキストの「真面目な」思想内容と総合する視点がいっそう肝要になる

## 3. 研究の方法

(1)M・バフチンの道化論、また山口昌男をはじめ、1960～70年代に比較神話学や文化人類学の分野で取り上げられて成果を挙げた〈道化論〉は、文学研究の領域では十分に生かされなかった憾みがある。それらの成果を

あらためて検証し、その〈道化論〉的視座を援用することによって、前記の課題を明らかにする

(2)ゲーテのローマ体験に基づく『ローマの謝肉祭』と『ファウスト』、とりわけ第二部第1幕のカーニヴァルの場を比較考察することで、①ハンスヴルストやアルレッキーノに至る、連綿とつづく喜劇の伝統につながる要素を究明する②そのことを通して、とかく無用に長大な場と見られがちな「仮装舞踏会」の「諧謔・戯れ」の背後で進行しているきわめてアクチュアルな、その意味で「近代的な」主題を浮き彫りにする

(3)ハンガリーの神話学者K・ケレーニイの研究も手がかりに、ホムンクルスを〈道化論〉の視点から「神話的トリックスター(いたずら者)」と捉え、①メフィストとの親縁性を明らかにする②また、その作業をつうじて、難解で知られる「古典的ヴァルプルギスの夜」の場の構造を明らかにし、その場が『ファウスト』全体、とりわけ「ヘレナ悲劇」において持つ意味を解明する

## 4. 研究成果

研究の中間報告として学会誌に発表した論文「道化メフィスト—『ファウスト』における道化的視点の意義」は、幸いにも高い評価を得ることができた。そこでの批評を踏まえて執筆した、「道化の知恵—『ファウスト第二部』第1幕、〈宮廷の場〉をめぐって」と「トリックスターの彷徨—〈古典的ヴァルプルギスの夜〉のホムンクルス」の2論文において、さらに論を深め発展させた。いずれの論文も、本年度中に査読のある専門の雑誌に発表してさらに批評を仰ぐべく、エントリーを済ませている(「道化の知恵」はすでに審査を通過し、「東北ドイツ文学研究」、52号に掲載予定で、現在第2校の段階であり、「トリックスターの彷徨」は、ゲーテ自然科学の集い・学会誌「モルフォロギア」31号に掲載予定で、目下査読審査中である)。

以下、上記3論文を中心に、その要旨を紹介するかたちで、本研究の成果および意義について手短かに報告したい。

### ○ 「道化メフィスト」

『ファウスト』には、「献詩」「劇場での前狂言」「天上の序曲」という3つのプロローグが付けられている。1806年に『ファウスト第一部』が発表されるに先立ち、1800年前後に書かれたと推定されるこれらのプロローグが加わることによって、『ファウスト』の構想は面目を一新することになった。

3つのプロローグは明らかに『第二部』をも見据え、『ファウスト』全体の大きな構想の基に書かれている。そのことは、ゲーテが

「まことに真面目な諧謔」と呼んだ『ファウスト』の独特な性格とも密接に関わっている。プロローグによる新たな構想以後、〈道化〉としてのメフィストの性格がつよく打ち出されたことによってもそのことは裏付けられる。「劇場での前狂言」の「道化役」の台詞として書かれた、補遺に残された詩行——「道化がすべての場面を駆け抜けりゃ、／このお芝居も充分つながりができるというものです」において、「このお芝居」とはこれから演じられる『ファウスト』劇を措いて他にはありえず、「道化」がメフィストに委ねられているとすれば、新たな構想に際してゲーテは、まさしく〈道化〉的視点に全体を統べる機能を持たせようとしたことになる。

①3つのプロローグとメフィストの「道化性」とは一体のものとして構想されている

②『ファウスト』は「天上の序曲」によって全体としてバロック劇の「世界劇場」としての性格を持たされている

③さらに「前狂言」「献詩」というメタフィクションのプロローグが置かれることによって、「天上の序曲」そのものがひとつの「お芝居」と化している

④「天上の序曲」のプロローグは、バロック劇から様式を借りた「様式引用」にすぎず、『ファウスト』は、厳密な意味で、一見そう見えるバロック的な「世界劇場」ではない

⑤以上のような重層的な構造によって、はじめて、『ファウスト』に真にアクチュアルな主題を扱うことが可能になり、その「近代性」が保証されている

⑥逆説的ではあるが、ファウストの「救済」そのものがメフィストの「道化性」によって準備されている

⑦おそらく、そこには、「道化」を要請せずにはおかない人間の存在論的「悲劇性」の認識が根底にひそんでいる

⑧『ファウスト』における「喜劇性」は単なる喜劇性ではありえず、上記の意味での「悲劇性」と密接に関わっており、ゲーテのいう「まことに真面目な諧謔」もまさにその謂いであり、それゆえにこそ、全体を綜合するものとして〈道化論〉的視座が浮かび上がってくる必然性がある

#### ○「道化の知恵」

従来『ファウスト』研究において軽視されてきた『第二部』〈宮廷の場〉には、メフィストが文字通り「道化」として登場し大活躍する。バフチンは「道化」とともに文学世界に持ち込まれたものに「特殊な複雑さと特殊な多層性」を挙げているが、むしろゲーテは、「道化」を導入することによって、多層化する複雑な「近代世界」の本質を描き出そうとした、と見ることができる。具体的には、紙幣の発行に象徴される、「新しい経済」の浸

透による「旧体制（アンシャン・レジーム）」の崩壊と終焉の過程である。従来「非政治的」なゲーテを象徴するもののように見られてきた「仮装舞踏会」の深層で、きわめて「政治的・社会的」な歴史のドラマが進行していることを、テキストに即して明らかにした。そして、繰り返しになるが、テキストにそのような多義性・多層性をもたらし、『ファウスト』をきわめてアクチュアルな主題をはらむ「近代」の劇たらしめているのが「道化」的視点であることを、改めて強調しておかなければならない

#### ○「トリックスターの彷徨」

本論文は、ハンガリーの神話学者K・ケレーニイの所説も援用しながら、ホムンクルスを神話的「トリックスター（いたずら者）」と捉えることで、難解で知られる「古典的ヴァルプルギスの夜」の構造を明らかにすると同時に、この場が「ヘレナ悲劇」、さらには『ファウスト第二部』全体にとって持つ意義を解明しようとする。

すなわち、トリックスターとしてのホムンクルス—そこでは当然メフィストとの親縁関係も明らかにされる—が、神話的世界を経巡ることによって、豊饒で多様な始原の自然が繰り広げられる。滅してはまた生み出し、無限に「生」と「死」を反復するこの多産で豊饒な自然、ないし宇宙の姿が描かれることなくして、悲劇の終曲におけるファウストの「救済」もまたありえない。「近代的人間」ファウストの救済とは、「永遠にして女性的なるもの」に象徴される、この絶えず生みつづける「自然」による「救い」と見ることができるからである。その意味で、「古典的ヴァルプルギスの夜」も、そこで活躍するホムンクルスの意義も、いかに強調しても強調しすぎることはない。

本来「ヘレナ悲劇」を準備する「ヘレナ前史」として書かれ、「仮装舞踏会」の場とは違った意味で冗長で難解とされ、全体の筋にとって不要とまで言われた長大な場が、「道化」という視点をとることによって、『ファウスト』劇にとってきわめて本質的な、不可欠な部分をなすことが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

①田中岩男「『ファウスト第一部』における〈時間〉の諸相—〈近代的人間〉ファウスト、あるいは近代と時間」、東北ドイツ文学研究、50号、33-72、2007、査読有

- ②田中岩男「道化メフィストー『ファウスト』における道化的視点の意義」、ドイツ文学、133号、167-183、2007、査読有
- ③田中岩男「パンドラと希望」、ゲーテ年鑑、49巻、155-159、2007、査読有
- ④田中岩男「ファウストとグレートヒエンー〈グレートヒエン悲劇〉とは何か?」、人文社会論叢、人文科学篇、16巻、43-77、2006、査読無

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 岩男 (TANAKA IWAO)

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号: 70091618

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者